

「支子文庫本勅撰和歌集抄出注」について

山田, 洋嗣
福岡大学人文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/11920>

出版情報 : 語文研究. 69, pp.33-44, 1990-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

「支子文庫本勅撰和歌集抄出注」について

山 田 洋 嗣

九州大学附属図書館支子文庫に「後拾遺集 抄書」という一書を蔵するが、その内容は実は後拾遺集から千載集にいたる勅撰和歌集から和歌を抄出して注釈を施した書であって、必ずしも注釈史に恵まれているとはいえないが、この期の勅撰集の注として注意される。本書はかつて報告されたことがないようであるし、またその分析を通して和歌の注釈や享受の問題の一端をうかがうこともできそうに思われるので、紹介を兼ねてその性格の基礎的な考察を試み、大方の教示を得たいと思う。また、全体の翻刻と解題は近く別の機会に行いたい。参照いただければ幸甚である。

なお、標題の「支子文庫本勅撰和歌集抄出注」は私に付した仮題である。九州大学附属図書館では前記書名で登録されているが、これは、最初の端作りを書名と誤認し、さらに「抄出」を「抄書」と誤ったものと思われる。本来の書名が失われているうえ、内容からしてこの書名も適当とはいえないので、僭越だができるだけ内容が知られるような名称で仮称することにした。

一

本書は、函架番号、「支子文庫/9111コー23/1」、江戸後期の書写にかかる楮紙袋綴一冊本。外題なく、本文冒頭(端作り)に「後拾遺集 抄出」とあって、順に、後拾遺集抄出・金葉集抄出・詞花集抄出・千載集抄出(卷一八まで)の四部からなる。今のところ他の伝本は報告されておらず、孤本とみてよい。なお、本書が原本ではなく、転写本であることはいくつかの徴証から明らかである。しかも、そのある段階では校合に用いることができる二冊以上の伝本があったことも知られ、ある程度の流布を想定できる。成立は、宗祇の引用がみられることから、上限は室町末期以降、下限は書写時期である江戸後期頃までだが、おそらく江戸期の成立とみてよく、中期頃にまとめられたのではなからうか。書誌的な詳細その他については別稿にゆずり、ここでは内容、伝来に関わる二、三の事象をみておきたい。

本書は三代集と新古今集を欠き、その間のみを対象とするという

特異な形態でもあり、また残欠本とみられるので、これが原初的な形であるのかどうか考察しておく必要があるであらう。

巻頭卷末各一葉を掲げる（歌頭の数字は本書の和歌の通し番号。

以下同。」とアラビア数字および、オ・ウの記号で丁を表示した。いずれも私付）。

後拾遺集 抄出 春野

正月一日よみ侍ける

小大君

一 いかかねておくる朝にいふことそ昨日を去年とけふをことしと

此集は三代集のつき也三代集は古今後撰

拾遺也是は作者のよみやう秘事也こおほきみ

とよむ也いかにねておくるあしたなれは一夜の

ほとを去年といひことしといふそと也いかにとは

物をふしんする詞也いふこと、は事也こと葉

にてはなし

紫式部「一オ

誹諧詩
旅の恋

俊頼

三美

したひくる恋の奴のたひにても身のくせなれや夕と、ろきは

恋のやつことは恋にせめつかはるゝやうにくるしき事

をいふ也此夕と、ろきはむねのさはく事也をいふ也本

むねのさはく事は身のくせとなりてたひにても

夕と、ろきのすると也したひくるとは旅行まで

恋のはなれすつよく思ひをする心也やつことは

下人をいふ。也人の下人はせめつかはるゝ物なれは

恋にせめつかはるゝ事にたとへていふ也

三君 けふも又むまの貝こそ吹つなれひつちのあゆみちかつきぬら

ん「87ウ

巻頭は、後拾遺集からはじまるので、三代集の部分を脱しているとも考えられるのだが、冒頭に「此集は三代集のつき也三代集は古今後撰拾遺也」とある文言は、前に三代集があれば必要としないであらうから、一応この部分が本来の冒頭でもあったと考えられる。一方、巻末は千載集の巻一八の殆ど最後の部分まであって、以下を欠くが、その最末尾は上記のようにその丁の最終行に和歌のみが記されて終り、注がない。従って、この後には欠脱があるようだ。これ以前の集がすべて全巻にわたって注されているところからみて、おそらく巻一九、巻二〇（釈教、神祇）も存したものと考えてよいであろう。その後には新古今集の注があつたかどうかは現状では判断できないが、三代集を除いた注釈と考えてよいとすれば、注釈の多い集はにおいて注釈の少ない集に注付するといつたような、著者の何らかの特別な意識をみる事ができるであらうから、新古今集を含めないで考えるのがよいのかもしれない。

以上が認められれば、本書は、後拾遺集から千載集までの院政期の勅撰集のみを、集を基本的単位として意識し、注釈する書と考えられる。なぜそうした対象への興味や必要がうまれたのかということとあわせ、注意すべきものとみられるのである。

本書が注釈するのは三五七首。勅撰集別に新編国歌大観番号で示す。集名下は集ごとの総歌数である。(平)

〔表1〕

後拾遺集(一三三首)

- 一・一〇・一一・一六・二〇・四三・四八・五〇・五三・八二・
- 八三・九一・九二・九四・九六・一〇九・一一〇・一二二・一二
- 八・一三〇・一四九・一五三・一六三・一六七・一六九・一七〇・
- 一七五・一八九・一九〇・一九二・一九六・二〇四・二二〇・二二
- 二・二二九・二三三・二三四・二三六・二五三・二六五・二六七・
- 二七八・二八一・二八五・二九六・三〇四・三〇八・三一三・三二
- 三・三三三・三三六・三五二・三六五・三六九・三七一・三八二・
- 三八五・三九〇・四一四・四四八・四五〇・四六七・四八八・四九
- 五・五〇六・五一・五二五・五一八・五一九・五四四・五六八・
- 五七五・五八三・六一二・六一八・六二六・六四三・六五一・六五
- 九・六六一・六六九・六七一・六七二・六七六・六八〇・六八五・
- 六九一・七〇六・七〇九・七二四・七二〇・七五〇・七六三・七七
- 〇・七七七・八〇一・八一五・八一八・八二一・八三二・八四〇・
- 八六〇・九三九・九五二・九六二・九七八・九八二・一〇一五・一
- 〇一七・一〇三二・一〇五一・一〇五二・一〇五三・一〇六二・一
- 〇六三・一〇六八・一〇七一・一〇八四・一一四九・一一五〇・一
- 一五四・一一五九・一一六〇・一一六一・一一七二・一一七三・一

一七六・一一七七・一一九八・一二〇三・一二一七・一二二八
金葉集〔再奏本〕(五八首)

- 一・一五・五〇・五五・九二・一一三・一二九・一三二・一三
- 三・一五四・一六八・一七三・一九七・一九五・二二七・二二二・
- 二二九・二三三・二三九・二四三・二六〇・二六七・二七〇・二七
- 三・二八一・二八二・二八六・三三三・三三四・三四一・三五三・
- 三七一・四二二・四一六・四二一・四二九・四三二・四四四・四六
- 九・四七九・四八〇・四九一・四九二・四九三・四九五・五〇七・
- 五〇八・五〇九・五一四・五二一・五五〇・五五四・五六五・五七
- 五・六一七・六二〇・六二五・六四四

詞花集(六二首)

- 一・三・五・二二・二四・二九・四八・五一・五四・六六・八
- 〇・八三・一〇七・一一〇・一一三・一二二・一三一・一四〇・一
- 四一・一四四・一四五・一五二・一六〇・一六二・一七〇・一七
- 一・一七四・一七七・一七八・一八六・一八七・一八八・二〇〇・
- 二〇五・二〇六・二二一・二二八・二三五・二三九・二三〇・二三
- 三・二三六・二五三・二六三・二七〇・二七四・二七八・二九七・
- 三二六・三三二・三三八・三三四・三四一・三四七・三五六・三七
- 二・三六六・三七三・三七八・三八二・四〇六・四一五

千載集(一〇五首)

- 一・八・二〇・三一・三八・六二・六九・七六・八六・九七・一
- 〇九・一一九・一二二・一四六・一六一・一七八・一八三・一九
- 八・二〇〇・二〇三・二二四・二三三・二四〇・二四七・二五九・
- 二六五・二六七・二八一・二八五・二八六・二九九・三〇一・三〇
- 二・三〇三・三〇四・三〇八・三二七・三三一・三五六・三六五・

三八九・三九四・三九八・四〇〇・四〇一・四二〇・四二二
 三・四七九・五〇〇・五五四・六〇四・六〇五・六一八・六三二・
 六二六・六四一・六四六・六五一・六七四・七〇三・七〇四・七〇
 八・七二六・七四九・七六〇・七六六・七七九・七八四・七八九・
 七九九・七九五・八〇二・八〇四・八〇五・八〇七・八一六・八一
 八・八二二・八四七・八四八・八八六・九〇八・九二九・九三六・
 九五二・九五六・九六一・九六四・九七〇・九八八・九八九・九九
 七・一〇一七・一〇二五・一〇三五・一〇三九・一〇四二・一〇六
 五・一〇六七・一一三七・一一五一・一一六六・一一九二・一二〇
 〇

これらの和歌から本書の性格の一端を推測できるようである。主として形態的な面から、これらが各勅撰集の中からどのよう採り出されたかをさぐってみよう。その勅撰集別の分布を三つの表にまとめた。「表2」は各集における歌数を示す(括弧内はその集の新編国歌大観本による総歌数と本注釈の採歌百分率)。「表3」は各集の部立ごとの歌数(集名下の数はその集の本書の採歌数、丸入り数字は巻次、部立の下は本書の採歌数)、「表4」は各集を通算した本書の部立別の歌数(括弧内は本注釈の総歌数の百分率)である。

〔表2〕

後拾遺集 一三三首(二二八首 一〇・八%) 金葉集 五八
 首(六六五首 八・七%) 詞花集 六二首(四二五首 一四・九
 %) 千載集 一〇五首(二二八首 八・二%) / 同卷一八まで
 一〇五首(二二〇一 八・七%)

〔表3〕

後拾遺集(一三三首)
 ①春上18 ②春下5 ③夏14 ④秋上13 ⑤秋下5 ⑥冬4 ⑦賀
 2 ⑧別3 ⑨羈旅5 ⑩哀傷4 ⑪恋一7 ⑫恋二10 ⑬恋三3
 ⑭恋四7 ⑮雜一2 ⑯雜二3 ⑰雜三5 ⑱雜四8 ⑲雜五4
 ⑳雜六20
 金葉集(五八首)
 ①春5 ②夏5 ③秋10 ④冬7 ⑤賀1 ⑥別2 ⑦恋上4 ⑧
 恋下15 ⑨雜上5 ⑩雜下4
 詞花集(六二首)
 ①春7 ②夏4 ③秋6 ④冬6 ⑤賀3 ⑥別4 ⑦恋上10 ⑧
 恋下5 ⑨雜上9 ⑩雜下8
 千載集(一〇五)
 ①春上8 ②春下5 ③夏8 ④秋上11 ⑤秋下8 ⑥冬8 ⑦別
 1 ⑧旅1 ⑨哀傷3 ⑩賀3 ⑪恋一5 ⑫恋二7 ⑬恋三11
 ⑭恋四3 ⑮恋五5 ⑯雜上11 ⑰雜中4 ⑱雜下3 (以下欠
 ⑲積教 ⑳神祇)

〔表4〕

春 四八首(二三・四%) 夏 三三首(八・七%) 秋 五三
 首(二四・八%) 冬 二五首(七・〇%) 恋 九二首(二
 五・八%) 雜 七六首(二一・三%) 賀 九首(二・五%)
 哀傷 七首(二・〇%) 別 一〇首(二・八%) 旅 六首
 (一・七%)

以上によれば、集による偏りは殆どみられず、平均的に注を施しているといつてよい。さらに、「表2」で知られるように、すべての集のすべての巻にわたって平均的に注釈することへの配慮がうかがわれる。このことは本注釈の性格を考えるてがかりになるであろう。同じことは「表4」からもいえる。各集を通算した本書の部立別の歌数も大きな偏りがなく、全体もまた歌数においてひとつの勅撰集のバランスを保っているかにみえる。これは、後にふれる本書に必ずしも注を必要としない平明な和歌が多くみられることとあわせ、難解な和歌への注よりも、各勅撰集を読み解きながら、その集の世界を平易に享受者の前に示すことが目標になっているかの感を与える。

「表1」から明らかのように、歌順は各勅撰集での順がよく保存されており、作者表記やその誤記が原勅撰集を見ていることに由来すると思われるので、対象の和歌をそれぞれの集から直接抜粋しているのは明らかである。すなわち、百人一首や九代抄のような何らかの基準で抄出してあったものに対して付された注釈ではないであろう。したがって勅撰集から対象となる和歌を抄出しつつ、注を付していく(あるいは対象となる和歌を抜き出したうえで注付する)という、抄出と注付の同時的な作業過程が想像されるのである。

しかし、既に撰歌されたものに対する注でないにもかかわらず、注釈する和歌の採択に秀歌撰との関係、特に百人一首との関係の深さがうかがわれることも本書の特徴のひとつである。百人一首との関係をみると、後拾遺集から千載集までには三九首の百人一首歌があるが、このうち三七首を本書は注釈している。勅撰に入集が少ない歌人、義孝・小式部内侍・道雅・皇嘉門院別当・兼昌・祐子内親

王家紀伊・三条院などがそろって採られているのは、百人一首を意識してのものと考えられる。また少ない勅撰入集歌のなから義孝・兼昌が三首を採られているのは、百人一首歌人であるからであろう。百人一首歌とその歌人を探り上げる配慮をしているように思われるのである。能因と基俊歌が採られていないが、その理由はわからない。作者についてはなお後述する。

その他、詠歌大概の秀歌体大略には二〇首の後拾遺・千載歌があるが、これらはすべて採られている、近代秀歌遺送本(近代六歌仙 経信・俊頼・基俊など)とは一八首のうち二三首が重なる(七十二%)、近代秀歌自筆本(八代集秀歌)とは一九首のうち一六首が重なる(八四%)、古来風鉢抄との重なりは少ない、などの諸点が指摘できる。すなわち、本書は秀歌撰あるいは歌仙秀歌撰的なものを含みこんでいるということになるであろう。

三

本書に注釈される和歌の作者は、詠人不知を除いて一四九名である。それを五十音順に整理すると「表5」のようになる。作者名に付した数字は採歌数である。

「表5」

- ㊦ 赤染衛門6・安芸(待賢門院) 1・顕季3・顕輔4・顕綱1・家隆1・和泉式部13・出雲(前斎院) 1・伊勢大輔4・一条院1・出羽弁1・惠慶4・越後(前中宮) 1
- ㊧ 懐寿1・加賀(待賢門院) 1・花山院3・兼明1・兼実1・兼

- 澄2・兼久1・兼房1・兼昌3・兼盛3・紀伊1・教円1・慶暹1・行尊1・清輔4・公実6・公任3・公資1・国信1・国基1・国行1・小大君2・後三条院1・小式部内侍1・小大進(花園左大臣家)1・小弁(祐子内親王家)1・後冷泉院1・伊経1・伊通1
- ㊦ 西行6・斎宮女御1・最厳1・相模8・桜井尼1・定家2・定頼2・讃岐1・実方5・実定1・三条院1・慈円1・重保1・重之4・寂然2・俊恵1・俊成11・清胤1・淨蔵1・季通1・周防内侍1・祐家1・輔尹1・輔親2・輔仁1・輔弘2・相如1・崇徳院3・清少納言3・増基1
- ㊧ 大式三位3・高遠1・孝善1・隆頼1・忠通5・忠盛1・為政(友政)妻1・為善1・大輔(殷富門院)1・親隆2・中将(上東門院)1・中納言女王1・忠命2・長真1・長明1・経任1・経長1・経信5・定子1・道因3・道命3・登蓮1・時房1・俊房1・俊雅母1・俊頼22・知房1
- ㊨ 仲実6・長実2・仲綱1・長能8・仲正2・摩1・成章1・二条院1・能因11・範永2
- ㊩ 肥後2・别当(皇嘉門院)1・弁乳母(陽明門院)1・堀河(待賢門院)2
- ㊪ 雅兼2・匡衡1・匡房9・正通1・雅光1・参河1・道濟2・道信3・道雅1・通実1・到時1・紫式部3・以言1・元輔1・元任1・基俊9・師頼4
- ㊫ 保昌1・永胤1・永縁1・義孝3・好忠8・嘉言3・能宣4・義通1・能元1・詠人不知13・頼家2・頼実1・頼綱2・頼時1・頼政3・頼通1・頼宗1
- ㊬ 良暹5・連敏1

作者を中心に、その特徴を考える。大雑把に言って、拾遺集歌人以降の注意すべき歌人はほぼ網羅しているといつてよいが、さらに所収歌数の多い順に並べると興味深い事実¹⁾に気づく。「表6」は採歌歌人を歌数別に編成したもの、「表7」は各勅撰集の多数入集歌人である。「表5」では百人一首歌人に傍線を付し、「表7」では本注釈に和歌が入らないものを四角で囲んだ。

〔表6〕

| | |
|---------|-----------------------------------------------------|
| 22首(1名) | 俊頼 |
| 13首(2名) | 和泉式部・詠人不知 |
| 11首(2名) | 俊成・能因 |
| 9首(2名) | 匡房・基俊 |
| 8首(3名) | 相模・長能・好忠 |
| 6首(4名) | 赤染衛門・公実・西行・仲実 |
| 5首(4名) | 実方・忠通・経信・良暹 |
| 4首(6名) | 伊勢大輔・頭輔・忠慶・清輔・重之・師頼 |
| 3首(15名) | 顯季・花山院・兼昌・兼盛・公任・崇徳院・清少納言・大式三位・道因・道命・道信・紫式部・義孝・嘉言・頼政 |
| 2首(19名) | (省略) |
| 1首(92名) | (省略) |

〔表7〕

- 後拾遺集 和泉式部 68 相模 39 赤染衛門 32 能因 31 伊勢大輔 26

元輔 26 能宣 26 道濟 22 長能 20 公任 19

金葉集「再奏本」 俊頼 31 経信 26 公実 23 頭季 20 忠通 15 長

実 14 頭輔 14 行尊 13 永縁 10 源頭仲 8 雅光 8

詞花集 好忠 17 和泉式部 16 匡房 14 俊頼 11 花山院 9 道命 9

赤染衛門 9 能宣 8 崇徳院 7 (精撰本 4) 忠通 7 頭

輔 6

千載集 俊頼 52 俊成 36 基俊 26 崇徳院 23 俊恵 22 和泉式部 21

清輔 20 道因 20 円位 18 匡房 17 実定 16 兼実 15 季通

15 堀河 15 頭輔 14 頼政 14 覚性 13 頭昭 13 公任 11

〔公能 10〕 〔教長 10〕

この二表から、本書に多く注釈される作者は各勅撰集でも多数の入集をはたしている歌人であることが知られる。本書での採歌歌数は勅撰入集歌の多少にみあった数になっていること、すなわち、本書は注釈の対象としてそれぞれの勅撰集の代表的歌人の和歌を多く抜き出していることが確認されるのである。この点で、各集の特色をよく保存しているといってもよい。当然ながら歌数の多い歌人はまた百人一首歌人と多く重なる(義孝・兼昌の三首がその勅撰集入集歌数に比して多いことは既に述べた)。各集の入集が多い歌人は和歌を引かれる可能性も高いわけで、本注釈の傾向が勅撰集の歌人構成に通じるのは当然の結果といつてよいのかもしれないが、難解歌の解説を専らとするものであるならこれほどの一致はみないのではないだろうか。難解な和歌は必ずしも秀歌ではなく、集の代表的歌人によって多く詠まれるものでもないからである。前節で想定した歌仙秀歌撰の性格をここでもみる事ができる。注釈の目標が難解

な語や難解歌の解釈だけにあるのではなく、広く秀歌評釈を行い、代表的歌人の和歌にふれるといったことにも置かれていてと想像されるのであるが、なお具体的な事例に即して次節で考えたい。

四

本書の基調は概ね次のようなものである。詞花集は比較的古注に恵まれていて比較の便があるので、本書の詞花集部分の冒頭を例にあげる。現存のどの注とも異なる注であることが明らかである。

詞花集 抄出

春部

春立こゝろを

大蔵卿匡房

一六 氷るししかのからさき打とけてさゝ波よする春風そふく

巻頭の哥なればたけたかき哥也春風水をとくといふ本説

のよせ也氷とけ水にさゝ波のよする躰也

一七 ふるさとは春めきにけりみよしのゝみかきかはらに霞こめた

り かきといふよりこめたりとよめる也春めきにけり春めく

躰也。みかきかはらもよし野にあり

一八 雪きえはゑくわかかなもつむへきに春さへはれぬみ山へのさ

と 雪きえなはわかかなをもつまんとおもふにみ山は春も

52才

はれくしからす雪のふる躰也ゑくとは芹のわかもえな

一四 　しら雲と見ゆるにしろし御吉野のよしのゝ山の花さかりかも
り
　　しら雲花の雲なりよしのにしろ雲のことにくに見ゆるは花
のさかりかと也かもとはうたかふ心也又かなといふ心に
よめる哥多かるへし

遠山桜

一五 　九重に立しら雲と見えつるはおほ内山のさくらなりけり

　大内山仁和寺山の上也大内とは禁中をいへは禁中の事に
よそへてよめる也又大内をは九重ともいへは山の名に
してさくらも九重にさくかと也　「52ウ

本書の注釈は専ら歌意の説明をすることで終る。過剰な深い読
み、たとえば中世的思想や仏教的なものへの附会などはせず、歌意
の平易な解説を中心とし、実作の手引や心得などは書かれな
い。ただ、簡略だが要をつくしているといつてもよい。
　　ただ、一般的にこうした簡略な叙述だが、その中にも、ここには
みられないが、特に短い注と長い注が混在していることに注意した
い。たとえば注としてはきわめて短い次のようなものがある。

二五 　霜さえてかれ行をのゝ岡へなるならの葉ひろに霰ふる也

　冬かれの岡辺のならの葉に霰のさひしき跡也

二〇三 　独居てなかわる宿の萩のはに風こそわたれ秋の夕くれ

　ひとりゐるの宿をは風のみ音つれて人はとはぬよし也

三三 　七夕にかしつとおもひしあふことをそのよなき名の立にける

かな

　あふことを七夕にかして我はあはぬになき名の立ぬる事
よと也

三三

な

　すみわひて身をかくすへき山里にあまりくまなきよはの月か
　　身をかくすへきくまもなく月のさやかなればあまりくま
なくすめる月かなとよめり

それに対して、

三四

き

　たのめこしのへの道しは夏ふかしいつくなるらんもすの草く
もすの草くきとは虫をとりてもすの木にさしをくをいふ
也又霰をいふ説あり不用也むかしあるおとこ女に行合て
女の家をいつくそとひしにもすのなくとをりなるよし
をしへし也のちにたつね行しかと女の家につねあはぬ
と也それよりもすの草くきは道のしるへといふ也此歌
の心もたのめをきし人のもとへゆかんとおもへは夏草し
けり草くきも見えねはいつくなるらんと草くきをたつぬ
る心也　春されはもすの草くき見えすとも我みやらんの
君かあたりを

のような比較的長い注が混在しているのである。短い注は殆ど何も

述べていない。単なるいいなおしで、それもほとんど改めて注する必要の感じられない程度のものでいえる。長い注は和歌がふまえる故事を丁寧に説明しているといえるだろう。つまり二者は態度が異なるので、それは目的が異なることによるのであろう。

前者のように歌意を平易にいいなおすことは、先に述べたが、本書の基本的な方針であるようだ。もう少し長く、いいなおしだけに終っていない注でもこれはよく守られていて、きわめて多くの注に、心也、と也、とそ、よし也、躰也、といった形で和歌の大意ないしその趣向が簡略に記されている。しかし、結局たいして有効とも思われないいかえに終っている、いかえのためのいいかえにすぎない注はなぜ必要とされたのであろうか。

後者は注釈らしい注釈といえるが、この長い注を付されている歌人のうち、特に仲実と師頼に注意してみたい。前節の「表5」「表6」で、他歌人にくらべやや特異なのが、仲実と師頼である。いずれも「表6」に入らず、百人一首歌人でもないが、仲実は六首、師頼は四首の和歌がみられるのである（金葉集初出歌人であるから三集での数ということになる）。「表5」の師頼までの歌人について、その後拾遺集から千載集までの総入集歌数のうちの本書の歌数を百分率にしてみると、きわめて多くの人集歌がある和泉式部などは別格として、多くの上位歌人は、ほぼ二〇パーセント内外であるのに、仲実は六〇パーセント、師頼は四〇パーセントになることが知られるので、前節で述べた本書が勅撰集の代表的歌人の詠を多くとるという傾向からはずれているといつてよい。そこで、その注をみるとこの二人の和歌への注は詠みこまれている注すべき語への注といった性格が強い。それが比較的多く詠がみられる理由であらう。たとえ

ば次のような例である（傍線は筆者による。以下同）。

三三

まふしさす賤おの身にもたへかねて鳩ふく秋の声たてつ也
まふしとはしつといはんため也鹿なとをとる時柴をきり
たてかくれをする事也鳩ふくとは鳩のまねをする事也是
も声たてつといはんため也しつの心なき身にも恋ちゆへ
は声をたて、うちなくよし也

これらは平安期以来注釈がつづけられてきた語であって、本例もやはりその伝統を継ぐものであるといえよう。なお、仲実歌では、「一五」「はし紅葉」「一六」「しなかとりぬなのふしはら」「二三」「野中の清水」「二六」「ひくらし」「二七」「水のみわた」といずれも同様の語が注されており、これらが注に価すると思われたため比較的多くの和歌に目が向けられたのであろう（前記五歌の「あぐ」もそうした語である）。師頼歌では、「一四」は「古のなにはの事」「一八」「あさかのぬま」「三三」「くめの岩橋」のように故事の解説が主であり（二四のみ簡単な歌意の解釈）、同様に解釈される。前記の三三は「もすの草きき」が同様の例であるためなされた注釈であらう。

それに対して、短い注の場合、注付よりその和歌を採ることに主たる目的があるのではないであらうか。秀歌という基準で和歌を抜き出した場合、時として注釈というほどの解説を要しないものが採られることになるのであって、本書がこのような形態であるがために、それらにも一様に注する必要がある、それらが短い注になったのであろう。常識的だが、短い注の場合、和歌をとることに主眼があり、長いものは注することに主眼がある。この特徴は、秀歌を

採ることと、難解歌の注をすることが同時になされていることのあるらわれと考えてよいと思われる。「抄出」という端作りはその性格を暗示する。秀歌撰的な性格をここにもみることができが、一方で正統的な注釈らしい注釈がみられて、複眼的な視点を持つ注であることに注意したい。

五

これまで述べ得なかつた注の記述内容にみられる特徴をいくつか指摘しておく。

和歌の評価にあたっては、「おもしろし」、「たけたかし」、「艶」などの語がみられるが、数例にかぎられ、しかも先行の言説の引用と思われるものが多く、こうした姿や景氣に言及しての総合的な評価を加えることをしないのが基本的なありかたである。

それに対して、表現技法の指摘はかなり多い。類別すると、本歌本の指摘(本歌の指摘にあわせ「一重」の語を用いるものがある、また本説の指摘に「よせ」の語を用いる、たとえば前記(五番歌)、縁語の指摘(「えん」、「……より……とよむ」など、例えば前記(三番歌)、掛詞の指摘(「たちいる」を用いることが多い、他に「かく」、「そふ」、「かぬ」など)、序詞の指摘(多く「……といはん序也」、「……といはんための序也」の形式)、比喩の指摘(「よそふ」を多く用いる、他に「下の心」、「ふくむ」、といった形で指摘している。技法については、かなり丁寧でわかりやすい解説であるといっているであろう。

先行説の引用は少ない。引用は、番歌に「経信のいはく」、三吾歌

に「定家卿いひおきたまへり」、三元歌に「宗祇の説には」と、経信、定家、宗祇の名がみえるほか、書名を記さず、「伊勢物語」、「源氏物語」、「(佐為相筆本)好忠集」を引いている。また、特定できないが、「とぞ」、「いへり」、「説」のように先行説をうけるものがある。経信説はおそらく「難後拾遺抄」と思われるが、その意を取って紹介しており、定家、宗祇も同様で、ほとんど出典の断定に迷うほどにいいかえて、正確な引用をしないようである。

おそらく理解しやすさが第一に考えられてこうした配慮をしているものである。内容に道統意識や説の普及を図るようなところはみられず、初歩の者の鑑賞本位に書かれたといった感がある。

六

以上、本書の概要を紹介しつつその性格について述べた。本書の注釈には、百人一首歌あるいは著名歌人の和歌への注、注を付しての秀歌の紹介、難解歌や難解な歌語をふくむ和歌の読解、の三つのレベルが混在している。注釈の側からいえば、勅撰集注に秀歌撰、歌仙秀歌撰の意識が混入し、それが注釈として平易なことでば簡潔に享受者に示されているのが大きな特徴である。

しかも、その背景に、院政期の勅撰集群という、三代集、新古今集にくらべ親しむことが少なかつたであろう撰集への関心をうかがわせ、古注に恵まれていない勅撰集への注付への興味が生じている点、そうした意識が江戸中期頃に持たれたということを改めて注意しておきたい。

その著者や享受者については明徴がない。これについても考えを

示すべきだが今の筆者には手にあまる問題である。また、前記したレベルの混在は、ある部分では近世的なものと前述の「もすの草くき」などの説話に代表される中世的な注の混在といいかえることもできる。こうした混在が江戸中期という時点でなぜ可能であったのかも大きな問題であろう。また、たとえば八代集抄の翳がみられないのかということなど、本書の成立時点の不明瞭さということもあるが、なお本書のみの問題にとどまらず、八代集抄や広くは近世期の注釈の問題としても考えられなければならないまい。その他いへばき事も多いが、いずれもより広い視野からの検討を要するであろう。今はすべて後日を期したい。

注

注1 本書は金葉集を再奏本によっている。以下本稿ではすべて再奏本を用いる。

注2 なお二箇所の歌順に相違がある(数字は本書の和歌の通し番号、括弧内は新編国歌大観番号)。

① 二四五(詞花三七二)・二四六(詞花三六六)・二四七(詞花三七二)

② 三三三(千載七九九)・三三四(千載七九五)

詞花集は非常に伝本が多く、歌の出入りや歌順の相違が多い集だが、このような相違のある伝本は今のところ報告されていない。千載集は、久保田淳・松野陽一『千載和歌集』によれば、三三四が龍門文庫本頭注に「後入」とある由である。おそらく、いずれも依拠した伝本に由来する異同と考えてよいのではなからうか。少なくとも勅撰集からの直接の抜き出しを否定することにはならないであろう。

作者表記には二種類の書き方が認められ、いわゆる歌仙に相当する作者は「俊頼」「俊成」のような表記であることが多いが、西行は詞花集では「詠人不知」、千載集では「円位法師」と、原勅撰集のままである。歌仙的な作

者でない場合や巻頭などはその勅撰集の表記そのままであることが多い。また、

△ かた／＼のおやおやとちいふ也この子のちよをおもひこそやれ
おやおやおはち也子の子はむまこ也むま子をおほちの千秋万

歳といはふよし也

大江嘉言

△ 君か代はつきしとそおもふ神風やみもすそ川のすまんかきりはその部分は、後拾遺集の前歌の作者を誤って書いたもので、初句が同じであるための目移りと思われる。

注3 詞書と作者の表記はきわめて恣意的で、省略や簡略化されることが多いが、詞書と作者名があれば説明の要のないはずの注がいくつみられる。たとえば、

(左京大夫頭輔、加賀守にてくだり侍りけるにいひつかはしける
三七 よろこひをくはへていそく旅なれはおもへとえこそとめさきりけれ
／＼源俊頼朝臣)

是はかゝの国へ行人につかはしたる哥也加賀とはよろこひをくはふるといふ字の心なれはとめまほしけれととめぬよし也くはへてはかさねての心也

のようなものや(括弧内を詞花集から補った、作者名や詠作事情を記すなどである。これらは、抜き出しと注付を別人がおこなったのではなく、抜き出した時に既に詞書・作者のむらがあったので注を付すときに必要になっ

てしまったものと考えることができ。

注4 公任の拾遺集歌が千載集に重出するのでこれを含めて数える。

注5 「詠人不知」のうち、四〇(後拾遺二六五)は光源、二四六(詞花三七二)は西行の詠だが、勅撰集の表記のまま「詠人不知」として数えた。以下も同様である。

注6 「勅撰集 付新纂集 作者索引」による。金葉集は再奏本。連歌・異本歌・後出歌を除くなど、若干の補訂をしたところがある。

注7 同じことは後出の「表7」からもうかがえる。

注8 百人一首歌人の他、定家が二首、家隆が一首、それぞれ千載入集歌を注

釈されていることも、このためであろう。

注9 百人一首歌や定家の詠への注が概して短いことも同じ理由による。

注10 複眼的な採歌基準に別人の採歌と注付を想定することも可能ではあるが、同一人物と考えるのが自然であるように思う。

注11 風体ではなく、景物に対し用いられた「おもしろし」は多い。

注12 定家説は「愚見抄」、宗祇説は百人一首・詠歌大概の「宗祇抄」と推定して比較した。なお、顕昭の諸注や「八代集抄」とは関係を持たないように思われる。

注13 他にも、勅撰集に対してかなりの独自異文を持つこと、さらに誤りと思われる本文（ないし特異な本文）を注の対象にしているものがあること、詞書と作者名の省略の問題（注3に記した）、引用の初歩的な誤り、などがみられ、それぞれに注意すべき問題である。

本書の閲覧を許された九州大学附属図書館に謝意を表す。

本稿は、一九八九年九月一六日の第七三回古典談話会で、「支子文庫本勅撰和歌集抄注について」として口頭で発表したものの一部である。その折多くの助言や示唆をいただいた。また、工藤重矩氏には後日懇切な書信をいただき新たな資料を示していただいた。記して謝意を表したい。なお、本書を見出すきっかけを作り、また種々便宜をはかっていただいた田坂憲二氏、発表の機会を与えられた『語文研究』編集部にお礼申し上げる。